広報もりよし

発行編集・森吉町役場企画開発課
印刷所・米内沢中央印刷所

No.242　1978. 2. 20

生涯教育特集

樹たちに

庄司　善徳

風はどっちから吹いているのだ。
こんなに　びゅうびゅうと
ひどくいじわるに吹いてくるのだから
樹になったものも
そうでないものも
きょうは　もうどんなにかつらくて
さみしいおもいをしていることか。

きのうは久々振りに
館の後から横志内の麓のちかくまで
ひとりで　のんびりと歩いて
柱の樹や　杉や　水楢、くぬぎ等と
いちいちていねいにあいさつをかわしたり
肩をだきあったりして帰ってきたのに
もうきょうは
こんなにも乱暴にいじわるに風が吹いてくる
まるで
大地に在ってはいけないのだとでもいうように
びゅうびゅうとして
風は吹いてくる。

けれども樹たちよ
しっかりとがんばってゆこう。
いじわるをする日の風にはけっして敗けまい。
そして
香ぐわしいターペンタインの匂いを放って
しっかりと大地を踏みしめていたまえ。
君たちに会いに
ぼくはまた
帰ってくるから。

（阿仁前田出身、船橋市住）

女子農業学校誕生記

長寿郎

(一)

阿仁地方に県立学校をほしいということは大正から昭和初期にかけての、この地方の念願であった。大館には明治時代から旧制の中学校（今の鳳鳴校）や高等女学校があるし、鷹巣には郡立七日市農林学校が移管された鷹巣農林がある。阿仁部の青少年の一部は大館に、大部分は鷹巣農林に汽車通学である。しかし、経済恐慌や凶作等不況深刻な時代であったので、新しい県立学校増設など望むべくもなかった。まして、大東亜戦争進展し、一億一心死物狂いの生活、学生も勤労奉仕で校舎がら空きの頃である。食糧増産はもとより燃料問題の解決など急務中の急務であった。それにつけても青年女子の教育問題は、時代が時代だけに、一日も放置すべきでないと、阿仁部九か町村長（旧町村時代）が米内沢に会し、いかにしても県立学校を誘致すべきであると意見が一致した。

昭和十九年九月、知事の更迭があって、久安知事が宮城県から転任して来た。従来から新知事赴任の時は新聞記者諸君が県境まで出迎え、車中で抱負経綸（けいりん）を取材するのが例であるので、魁の倉田氏（現社長）に頼み、本県の懸案中の大問題は大野岱の開発にあることを力説して貰った。それかあらぬか久安知事は赴任早々、阿仁部町村及び大野岱視察を断行された。九月末か十月始めの頃であったか、情報により各町村はそれぞれ対策を講じた。

折しも、第八師団の砲兵演習が大野岱で行なわれ、将兵が米内沢に滞在中であった。知事は乗馬が得意で大野岱視察も騎馬隊にしたいとの希望であったので、軍馬数頭を借りてこれにあて、案内は、馬好きの金作県議を先頭にたてて、先ず米内沢から上下小阿仁、落合を経て上大野に至り、いよいよ高原大野岱三千町歩を横断踏破して米内沢に入り、昼食を日栄（開振地）の鯉茶屋でとることにした。町村長会はここで開き、いよいよ陳情を行なった。

（四面につづく）

婦団連主催の
青少年を考える集い
今月二十六日
米内沢公民館

森吉町婦人団体連合会（会長金イマ氏）では、去る十日、役員会を開いた結果非行を防止し、健全な青少年の育成を図ろうと、来たる二十六日（日）午前十時から米内沢公民館において「青少年を考える集い」と題して座談会を開催します。

PTAや高校生を持つ親の会にもよびかけてご婦人ばかりでなく、幅広い参加を期待しています。

司会は河田五郎先生。

前田婦人会
藤原愛氏を招いて総会兼研修会

前田婦人会では来たる三月五日（日）、基幹集落センターで総会および研修会を行います。研修会講師には県教育委員の藤原愛氏を予定しています。

当日は、午前は総会、午後は研修会の予定となっており、全会員の参加を望んでいます。

心の豊かな老後のために
派遣社教主事　花田　稔

人間だれしもが教育を受ける権利があり、秋田県では他県にさきがけて生涯教育を提唱して七年にもなりました。その間、森吉町は五十、五十一年度とパイロット指定を受け、町なりに乳幼児から高齢者に至る教育的施策を行ってまいりました。また「ブルーの窓口」という生涯教育奨励室や十五名の奨励員の方々を委嘱して、それぞれの分野で町民の皆さんの学習相談に応じていますが、義務づけられた学校教育とちがいましてなかなか徹底しないのが現状です。

人間は百人百様。とても全町民が満足できるような効果的な方法はないわけですが、私どもとしましてもできるだけ多くの方々に教育的なサービスをいたしたいと努力しているつもりです。

母親には無試験でなれるのですが、そのあとの教育は大変むずかしいのです。

むかしは大家族の中で、それぞれ個性を持った育てられ方をしたものでしたがいまは二、三人の精鋭？にしぼられ、それだけに大切にされて、かえって無気力、無感動の子になっていると先生方の教育研究集会でも指摘されています。一方新聞に見られる非行、自殺行為なども目をおうほどでPTAや親の会の活動に期待するものです。これらは社会参加のない子に多いといわれ、いまふるさと運動が盛んに行われていますが、森吉町でも寄延地区で中堅どころが中心になって、ふるさとを創造しようと努力しています。

余暇時間が増えているといわれています。気晴し、休息結構ですが、人生に生きがいを見いだす自己啓発にもいくらか割いてみてはいかがでしょうか。

心の豊かな老後をおくるために、いまからでもおそくない素地をつくろうではありませんか。

俳句との出会い
山本末吉

私が俳句を作り始めた動機は鳴蛙吟社の存在が大きい。戦後の混乱期からようやく立直りのきざしが見えた昭和二十一年五月、当時、村役場に勤められていた庄司勉作氏（故人）が主宰され、庄司茂氏、佐藤一太郎氏等が中心となって結成されたもので、私も誘われて投句したり句会に出席したりして大いに啓発された。その印象がこうまで俳句に対する愛着をつよめたものと思う。

吟社の名称は、会誌鳴蛙一号の庄司勉作氏の巻頭の言葉を借りれば「五人か六人の同人が鳩合して、とにかく俳句会を結成す。名づけて鳴蛙吟社と称するが、我が郷土の生める基角派の大宗匠弄月園喰風翁の「鳴き止めばみな水になる蛙かな」からとったことは云うまでもない。」とある。

当初の会員は、役場、前田郵便局、東北炭鉱等に勤める人達と多彩な顔ぶれであった。

しかしこの三十年の間に、この吟社にもいろいろと浮き沈みもあり、会員の中でもこの土地を離れた人、俳句から遠ざかった人達が多くいて現在では五、六人でほぼそとこの会を続けている。それでも以前の会員が戻ってきたり新しい人が会に入ったりすると意欲をかきたててくれる。

とにかく戦後の混乱期に、この地に他にさきがけて日本特有の短詩形芸術としての俳句の会を結成されたことはすばらしいことだ。

今では各地に俳句会が作られそれなりの活動をしてるるが、私達もこの伝統ある土地に在って先覚者達の意とするところを受けつぎ実のあるものに育てあげなければとその責務みたいなものを感ずるが、とかく物質文明の世の中に於て精神的な豊かさを求めていくことはなかなか困難をともなうことは否めないことである。

しかし人間にとってそれをよりどころとする時がきっとくるものと信じている。

（文化財保護審議会長）

原稿募集!!
あなたの思い出を綴る
民俗文集みちのくを発刊

公民館では、昔の思い出を綴る文集「民俗文集みちのく」を発刊いたします。枚数制限はございません。原稿は、特定の用紙でなくても、チラシの裏などをご利用下さい。清書の必要はございません。どんなにきたなくても、こちらで清書いたします。匿名も可能。

締切り、三月二十日。両公民館のどちらかにご郵送下さい。どんなにヘタでも結構です。ただし、次の趣旨をご理解下さい。

発刊の趣旨

私たちの周囲からは昔の名残りが姿を消そうとしています。このような時、私達は今は昔となった私達の生きて来た時代のことを記憶によみがえる限り文に綴り後世に残す義務を負っているものと思います。現代と比較したりしないで、ひたすら、昔の生活の思い出だけを綴り、歴史・民俗の資料として永久に保存します。

※昔話や民謡、伝説等も可。連載しょう励。

〔生涯教育〕
阿仁鷹巣教委が合同事業
三月六・七日
奨励員研修会の予定

阿仁鷹巣各町村教委の社教担当者は去る十三日、阿仁町体育館に集い、阿仁鷹巣生涯教育推進会議を結成し、第一回事業として来たる三月六・七日（予定）、上小阿仁村公民館で一泊二日の奨励員研修会を開催することを決めました。

この研修会は地域内の生涯教育奨励員六十名が集って、メインテーマ「奨励員活動はどうあるべきか」について勉強し合うもので、講師には、東北大学の塚本教授を予定しています。

なお、講演は一般の方にも開放することにしております。

主要行事
8日○高校生を持つ親の会役員会（米公）
18日○社会教育委員会（役場）
26日○町民スキー大会（桂瀬）
○青少年を考える集い（米公）
4日○図書館協議会（予定）（町立図書館）
5日
○前田婦人会総会・研修会（センター）

さくら湯
石本邦代

いつごろからか、我が家では、お正月やおめでたい時に、さくら湯を飲む習慣があった。

家族そろって「おめでとう、健康で、今年もよろしく」と挨拶をかわした後きまってさくら湯でなごむ。

長女の結納のときも「今日はお日柄もよく、おめでたくて」と先方さまから挨拶をいただいて、家族みんなで飲んだ。

将来、孫が生まれても、いつになるかわからないが二女の結納のときにも、飲むだろうと思う。小さいビンに入った桜漬は、冷蔵庫の片隅でわが家の吉報を待ちわびている。

次の文は三年ばかり前、「へき地教育通信」に載せたものである。

年の初めに親戚の人たちと挨拶を交わしたあとでさくら湯をたしなむ習慣が四五年と絶えている。

先日、東京にいる大学三年の娘から、友だちと木曾路を旅行して、さくら漬を買ったという便りをもらった。「お正月にはぜひ家族そろってさくら湯を飲みたいと思っております」こう結んであった。娘が幼い頃の習慣を大事にしていることを知って私はうれしく思った。大抵の事は念頭から去っても、正月のすがすがしい気分で味わったさくら湯のことは心にしみついているに違いない。

なにかを心待ちしている時は、それとかけ離れたことを人間はしないものである。

娘の精神生活を律するある部面に、このような子どもの頃の生活習慣が生きつづけていることに私は喜びを感じたのである。そして娘と過ごす正月の情景を心にえがき、ふと、さくら湯の匂いに触れた思いがした。

今年は、父の喪の年なので派手なことは一切しないつもりでいる。そんな時さくら湯をたしなむ程度のことは、いかにも喪の家にふさわしい楚々とした感じを与えるのだが、考えてみると、あるいはこれほどぜいたくな営みもないように思う。

厳寒にうち震える真冬、春らんまんを偲ばせる桜花を茶わんに浮かべる仕種がかぎりなく豪華なものに思えるのである。

娘よ――と呼びかけるつもりで、私はいま手紙を書くところである。

（教諭　米内沢）

山美しく人貧し
細田幸作

私はあせっていた。朝日毎日、読売、次々と学科試験ではねられ、残るは中日新聞ただ一つであった。その学科試験合格通知を受けた時、私はジャーナリストとしての最後の望みをそれに託した。中日新聞は東海地方のローカル紙とはいっても、文化欄で定評のある東京新聞も傘下に納めていたので、移籍する事も可能な筈であった。私はその朗報を手に、東大の東洋文化研究所に勤務する根田さんを訪問した。根田さんは私と第一次秋田文学の同人で私の上京と前後して、文学修業を理由に、ここに職を得ていた。その夜、前祝と称して研究室の宿直室で彼の同僚一人を交えて酒盛りが始った。面接、身体検査なんて型式的な物で、入社したも同然だよとその同僚の人がいい、私もそう思った。万一、と根田さんが口を切ったのがきっかけで不安が胸一杯広がった私に、「そうだ、伊藤さんに推薦状を書いて貰おう」と根田さんがいい、よろよろ立ちあがった。代々木上原の伊藤永之介先生の御宅に着いた時は夜も大分ふけていたが、先生は今、中日新聞の農業関係の雑誌に小説を連載中とかで、その編集者に紹介状を書いてくださった。これで先ずは大丈夫と、深夜の訪問を詫びながら、気さくな奥様（故和崎ハル代議士の妹さん）の酌を頂き盃を重ねた。先生は酒をちびやりながら熱心にテレビを見ていた。奇妙な事にテレビは押入れの中にあり、根田さんがその事を尋ねると「私は一応、農民作家だからね」と先生は含羞の表情を浮かべていわれた。その頃テレビはまだ珍しく贅沢品だったのである。

名古屋本社での面接、身体検査も無事終わり、後は合格通知だけを待つ身になっていた頃、突然、母校の学生課長から呼び出しを受けた。学生課長は「只今、中日新聞の方から君の入社決定をいってきたが、大学としてお断りしたからそのつもりでいて欲しい」という。何故に！と眼を剥き出した私の前に課長は一枚の紙を示した。それは大学側に予め提出していた誓約書であった。それには大学側から紹介を受けた就職先の入社決定は先に決った会社に無条件で行きますという、私の誓約書が書いてある。幸か不幸か、都落ちいやさに滑り止めのつもりで受験していた二流の商事会社に私は合格していたのだ。身の不運を嘆きながら、その商事会社に一年未満通ったが、どうにも仕事に身が入らなく、故郷に帰ってきた。その後、伊藤先生は他界され座右の銘「山美しく人貧し」の石碑と共に故郷に帰られたが、私は未だにその石碑を訪れて、先生の招介状の労に頭を下げていない貧しい精神の持主である身を恥じている今日この頃である。

（商業、米内沢）

女子農業学校誕生記

（二）

「目下戦時中、食糧や燃料増産が緊急である。しかし労力が手一杯である。生産力の欠乏は女子の農業に頼らねばならない。本県には女子の農業学校がないのでこの際、知事は英断を以て大野岱に女子農業学校を新設してほしい。地元米内沢には既にこれを引受ける準備と自信がある。阿仁部の熱意をくんで早期に実現してほしい」

と陳情した。

知事は即座にこれを諒とし、よろしい、ただし、この機会に町村長諸君にお願いがある。県には第二次大野岱開拓の計画があるから用地買収に協力してほしい、第一次の開拓は土地を無償寄附して貰ったが、第二次は有償とし、酪農経営を主眼とし、北海道式にしたいという。我々はこの快報に接し知事の果断に驚いた。

かくて陳情は首尾よく終ったので、我々はいよいよ準備に取りかかった。手始めに、最近できた西目農学校を視察することにした。食糧配給時代であったから配給券を準備して一行九名阿仁町長山本久蔵、前田村長土佐豊治、米内沢町長金為助、上小阿仁村長田中元久、下小阿仁村長桜田助吉落合村長成田安太郎、上大野村長工藤勇助、下大野村長高橋勘四郎、大阿仁村長代理渡辺収入役等である。

とりあえず、西目役場で農学校設置当時の計画や地元負担等いろいろ調査し、その日は本荘の旅館に一泊した。

帰途は県庁に立寄り、知事と会見する予定で、秋田市滞在中の金作県議を通じ時間、場所等を打合せ、翌日は日曜日であったが、知事室で視察報告をすると共に計画促進方を陳情した。

知事は、第一校舎をどうする、次は寄宿舎、次は校舎敷地および農場はとたたみかけての質問である。これに対し我々は大体次の通り答えた。

一、校舎は米内沢国民学校の一部新築した二階建教室一棟を提供する。実習本位の学校だから、当分は異動することが多いと思うから、阿仁町には元実科女学校の校舎（当時既に廃校）もあるし、林業の実習なら七座営林署に満洲国林業派遣生の宿舎及び教室にした建物が空いているから、これを借りることができるし、上小阿仁営林署萩形作業所もある。このほか、各町村大部落ごとに籾貯蔵倉庫（備荒貯蓄用）があるが、今は何れも空っぽになっているから必要に応じ、これらを移築することもできる。また米内沢町本城には産業組合の加工工場（醤油味噌製造、漬物等加工場）もあるから、これらを提供する用意がある。

二、寄宿舎は米内沢町本城金逸郎氏の住宅洋館二階建一棟（二十五人位収容できる）使用の内諾を得ている。（金氏は転地療養のため仙台に行き、管理者を定めて空家となっていた。）

（三）

数日後、県庁建築課坂本技師が、陳情した建物調査のため出張してきた。米内沢国民学校新校舎、金逸郎氏の二階建洋館、醤油味噌加工工場、それに二三の籾貯蔵倉庫、日栄長野岱校舎布地および農場（現米内沢高等学校布地）を実地調査した。知事からの直接命令で本年十一月の通常県会にかける準備だという。

かくて十一月県会に提案可決を経て翌二十年三月二十日、「県立大野岱青年道場」と一緒に決定発表された。名称は「秋田県立大野岱女子農業学校」として同年五月開校となった。校長は当時県庁食糧課長の畠山源義氏で、一緒にできた県立大野岱青年道場、場長の兼務である。畠山場長は本郡上小阿仁村出身で宇都宮高等農林学校（現宇都宮大学）出である。知事に郷土北秋開発のために献身せよと激励され、農務課の阿部芳哉、片岡社会教育主事と共に青年道場に転任してきた。三人とも北秋出身なのは知事の熱意のあらわれであった。

さて、校長は兼務であるから教頭は実力家でなければならない。この点において、人選は地元推薦にまかせられた。折良く河田太茂蔵氏が家庭事情から長野県の農学校長を退職して郷里鷹巣町に帰っていたので我々は氏に白羽の矢を立てた。

次は舎監兼教諭であるが知事はその人選を重視し、相手は女子のことであるから、家庭的に扱わねばならない、特に建物は新築の洋館であるし、篤志無料の借入であるから大事にせねばならぬと共に、しかしまた生徒を贅沢に育ててはならない、との内意である。いろいろ物色の結果、大館女学校教諭沼田イク女史を選んだ。女史は横手女学校以来、永く本県の女子教育に経験を積んだ方であるし、本城秋元家の孫でもあり、母の出身地で活動することになるので説得も容易かと思われる。再三懇願してようやく承諾を得た。

いよいよ学校を開いたが名称が「大野台女子農業学校」となっているので、世間では「大野岱青年道場」と間違い、郵便物等の混乱もあり、名称を「米内沢女子農業学校」と改める等のエピソードもあった。

五月の開校式は、日栄の農場敷地に杉丸太の門柱二本を建てただけであった。

さて、二十年八月にはあの大戦争もあっさり無条件降伏となって万事窮したがその後、男女共学の新学制ができたので、現在の「県立米内沢高等学校」に発展的解消となったのである。

最後に「米高」の発展と隆昌を祈って擱筆する。

（町史編さん会顧問）

紹介「町史編さん会」

近く史料編第三集を発行

町史編さん会（会長清水孔次郎氏）は事務局を町立図書館においていますが、会員制をとっており、どなたでも入会できます。

昨年四月に発足し、資料の発掘や調査、解読などにつとめています。昨年は五味堀、小又、米内沢等の部落文書、本紙で紹介済みの検地帳のほか他町村からも発掘、また庄司唫風の散逸文書の一部を入手しました。

桐内沢部落では毎戸を巡回調査しています。

六月から八月にかけては週一回、公民館と共催で、「町の歴史を知る会」を実施、啓蒙と人材の発掘、会員の資質の向上につとめました。

秋には「米内沢八橋焼展」を初めて実施、新聞に大きく報道されました

また本会の協力で本城金家から秋田魁新報ほかの明治初期資料が多量に発見され、内容が長期間に渡って魁紙上に連載されました。

近く、史料編第三集を発行するとともに、機関誌の発行を検討しています。